2017年08月27日

中原キリスト教会

　　　　　　　　　　　**「ギデオンの子アビメレク」**

聖書箇所：士師記9:50-57

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日は、士師記より学びます。士師記のなかで有名な登場人物ではなく、ギデオンという士師の子供で士師の一人には数えられていない人物の話です。そもそも士師記というのはどんな文書であるか簡単にお話ししておきます。モーセに指導された出エジプトから、後継者ヨシュアに率いられたイスラエル諸民族はカナンの地に侵入し、神から与えられた地を占領します。ヨシュアの死後、カナンの各所に散らばったイスラエルの民は士師と呼ばれる卓越した指導者の下、隣国の異邦人と戦い、イスラエル国家を形成していきます。そして、サウルを王とし、闘いを進め、サウルの後継者ダビデ王の時代に遂にエルサレムを首都とした確固たる基盤のイスラエル王国が完成しました。このような説明が、イスラエルの正統的歴史観です。しかし、現実の歴史はそんな直線的に進んだ訳ではなく、イスラエル建国に到る過程は複雑なものでした。その複雑さは聖書の文書の記述の仕方の差によって示されています。ヨシュア記における、カナン侵入の記事は「神による戦い＝聖戦」における奇跡により、イスラエル民族は首尾よくカナン侵入を成功させたように書かれています。そして「焼き尽くす＝聖絶」の名において、占領した部族を死滅させたことも書かれています。しかし、士師記1章におけるイスラエル部族のカナン進出に関する記事は既にその地に居た部族との間の交渉・妥協等紆余曲折ありつつ、カナンの地などに定住していったことが書かれています。ヨシュア記には、エリコ、アイにおける奇跡的勝利が記されていますが、想定されるヨシュアの時代には町は既になく廃虚となっていたことが考古学上ほぼ明らかになっています。なんらかの奇跡的出来事があったことは事実と思われますが現実は廃虚に近い地に侵入し、それら町に関する過去からの伝承と組み合わせ、ヨシュア記の記述がのちになされた、と解釈するのが妥当だと考えられます。歴史的事実をそのまま記述したものではなく、イスラエルのカナン侵入という歴史的事実と、その地に語り継がれてきた伝承との合成である、と考えてよさそうです。したがって「聖絶」というのも文字通りの集団殺戮を行った、という意味ではなく、宗教的に異教的なものはすべて廃絶し、その地を聖なるものとした、ということの表現であろう、と思われます。

更にもう一点、述べなければなりません。ヨシュア記ではイスラエルの部族はヨシュアの指揮の下団結しカナン侵入を成功させたように見受けられますが、士師記を見ると一部部族間の協力・同盟はあるにしてもイスラエル十二部族全部が一致して異民族と戦う、というところは見られません。しかも12部族の素性も出エジプトを経験した者の子孫かどうかは解りません。当時、エジプトは弱体化し、トルコの地で嘗て強力な帝国をたてたヒッタイトも見る影を失い。またシリヤ、メソポタミアの地域は古バビロニアが衰退し、アッシリアはまだ力を蓄えている時期であり、カナンの地は歴史上稀に見る真空地帯的状況にありました。そこに主に西から「海の民」が侵入し、それにおされてフェニキア、ペリシテの民がカナンの地に移動していました。また東の方のアモン、モアブ、南方のエドム、ミデアンの地からも、様々な部族がカナンの地に侵入していったことは確実視されています。すると、イスラエル12部族といっても血統的にヤコブの子孫であるのみならず、出エジプトの民の「主なる神」を共に拝する部族と既に住んでいた諸民族の離合集散が展開されていった、と考えられます。一時、キリスト教神学のなかでイスラエル12部族の神聖部族連合が存在した、と考えられた時期もありますが、現在ではそのような組織された部族連合が最初からあった訳ではない、と考えられています。その意味ではイスラエル民族というのは宗教的にしか定義できない民族で人種的には寄せ集め、というのは今の「ユダヤ人」と同じことです。このような歴史的事実を踏まえて聖書を見ると、ヨシュア記などより、士師記は事実を率直に伝えている、イスラエル民族にとって恥になることも伝えている文書だ、と言える、と思います。士師記第1章の記述をみると異邦人とともに生活せざるを得なかったイスラエルの部族のことが語られています。

しかし、そもそも弱体であった出エジプトの民が、最終的には他の優越した部族を抑え。豊かな地を持つカナンの人々を支配するまでになったことは、奇跡としか言いようのないことです。最終的にはダビデ王国を形成するまでになったのですから、「主なる神」の直接的歴史介入があった、と理解するのは当然です。そのなかで過去の自らの歴史叙述の上で、所謂イスラエル正統史観が形成されたのです。歴史的事実の解釈態度としてそのような思想によって自らの正当化の一つとする面がでてくるのもやむを得ないところがあります。しかし、聖書は単にイスラエル民族正当化の書物ではありません。自らにとって全く不都合な事実も記述しているのです。イスラエルの主なる神は、異民族を果ては悪をも摂理を知らしめるための手段として使われるのです。根本には、主なる神は人知をはるかに超えた方なので、イスラエルには知り得ない計画をもって愛する民に臨んでいるのだ、という確信があるのです。じつは、それが信じられず、神より離れることもあります。しかし、主なる神以外に帰って行くところはないのです。士師記の記述は普通でみれば恥ずかしい事柄の連続です。人間の欲が渦巻く姿を隠しません。その結果として神の怒りを招くことを知りつつも記録していきます。

ヨシュア記、士師記は選ばれた民の形成の時代であり、「主なる神」はその極めて弱体な民の軍神として立ち現われ、他民族に対する戦いを自らが勝利に導きます。これが「聖戦」です。また勝利の後、すべての生ける者についての「聖絶」命令を発します。これは、純粋な信仰共同体としてのイスラエルを形成するためです。しかし、イスラエルの民は「主なる神」の期待に答えることは出来ず、地場の豊饒神信仰の誘惑に勝てず、たびたび、偶像崇拝状態に陥ります。イスラエルの民はあまりにも少数ですし、経済的、政治的、軍事的にあまりにも弱体な者達だったのです。ヨシュア記における戦勝記録も現実にはいくつかの町中に小さな信仰集団を形成したにすぎません。士師記の時代にもカナン人との戦いが続きます。それに加え、周辺の他民族との戦いが記されています。カナン周辺についてはイスラエル部族に与えられた土地である、と言っても、名目的なものに過ぎなかったのです。むしろ、周辺民族はカナンの地に侵入の機会をうかがっており、これへの対抗上、イスラエルは強力な他民族と戦わねばなりませんでした。その都度、カナンの地に散らばったイスラエルの部族に参戦要請をして集まった勢力のみで戦わねばなりませんでした。おそらく、神の奇跡しか頼りにするものはなかったと思われます。しかし、ヨシュア記と士師記を比較するとその差にも注意しなければなりません。ヨシュア記では「神が戦われる」という「聖戦」思想が明白なのに対し、士師記ではその点があまり見られません。「神による戦い」から「人による戦い」に変化していったのではないか、と推察されます。それに応じ、「聖絶」命令も士師記では少なくなっています。第一の士師オテニエル、第二の士師エフデの2回に出て来るのみです。このことはイスラエルの信仰が地場信仰との混淆状態に既になっており、純粋なイスラエルの信仰を鼓舞する機運が薄れていたのではないか、と考えられます。

士師記には12人の士師と呼ばれる人物が登場します。12人はイスラエルの12部族からきている数字です。12部族から一人ずつの士師をあげようとしていることがうかがわれます。士師を輩出していないのは最も南の土地を嗣業として与えられたシメオンのみです。この部族はのちにユダ族に吸収される弱小部族です。なお士師記の著者はユダヤ人の伝承では列王記の最初に登場する預言者サムエルということになっているようです。士師には6人の大士師、6人の小士師がいます。大士師はオテニエル、エフデ、デボラ、ギデオン、エフタ、サムソンです。中でも、デボラ、ギデオン、サムソンが有名です。士師はイスラエル民族全体の裁き司として働いたと書いてありますが、叙述内容からしてそんな広範囲にわたって支配権を行使したとは思われません。影響力をもったのは数部族に過ぎません。本日のテーマとなっているアビメレクはギデオンの子供です。しかし、士師には入っておりません。士師記の著者の目から見ると、士師の一人とするのは不適当な人物だったのです。士師が登場し「主なる神」への信仰を立て直し、その士師が死ぬとイスラエルの神への背信が起き、異邦人による支配という裁きの下におかれ、イスラエルは回心し主を呼び求め、そして新たな士師が起こされる、というのが士師記のなかで繰り返されます。この循環は“罪→苦難→裁き→回復”という預言書の繰り返しパターンに符合しています。このことが、ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記がヘブル語聖書では「前預言書」と称せられる所以です。

ギデオンはミデヤン人の支配からイスラエルを解放した士師です。ギデオンはマナセ族の子です。その拠点はガリラヤ湖に近いカナンの地でも北の方です。メギドの北にあるエロンという町が中心です。ミデヤン人というのはアラブ系の人々を指す言葉ですが、カナンの南に住んでいた部族です。モーセが十戒を頂いたシナイ山のある地もミデヤンです。ギデオンの話は6章からはじまります。ギデオンは「勇士よ。主があなたといっしょにおられる」と主の使いに励まされます。しかし、彼は、怖気づきます。主が話している、という証を求め、それを見て、ギデオンの父ヨアシュは毅然としてアシュラ像は、自分を破壊から守ることができないのだから偽物の神だ、と言い放ちます。ここでギデオンはエルバアル即ち「バアルは自分で争えばよい」という名がつけられます。更に、“露の朝に土が乾いている”という奇跡により、自分が召命を受けているとの証を得たギデオンは遂にミデヤン人との戦いに立ちます。紆余曲折がありましたが、ギデオンはミデヤン人に勝利します。計略によりミデヤン人が同士討ちをし、敗走した、と書かれています。その後、ギデオンは他の小部族を討って勢力を拡大しましたが、そこでイスラエルは彼を王にしようと図りました。これに対し、ギデオンは8:23で「私はあなたがたを治めません。また、私の息子もあなたがたを治めません。主があなたがたを治められます」と答え、主を第一にする姿勢を示します。イスラエルはそもそも王制には警戒的なのです。後にサウルが王になる時もそうでした。しかし、ギデオンは罪を犯します。戦闘での勝利による戦利品の金の耳輪を皆に供出させ、それで祭司の飾りであるエポデをつくって自分の町オフラに置いた、と書かれています。「イスラエルは皆、それを慕って、そこで淫行を行った」と書いてありますので、民は、エポデを祀（まつ）ったところで偶像礼拝を行い、性的退廃を招いた、という事だと思われます。金のエポデをつけたギデオンを崇め奉ったのかもしれません。ここでは偶像礼拝という罪が暗示されているのみならず、ギデオンは神からの指名もないのに、大祭司職を名乗った、という罪もあります。また大勢のの妻がいたと言われてますので性的放縦の罪も十分考えられます。これだけの人数が居れば公平に取り扱うことなどできるはずはありません。また他宗教の妻は多数いたと思われますのでそれらの宗教的儀礼も行われたに違いありません。聖書の場合、このような指導者の罪はその解きの社会状況を象徴的に反映していることがほとんどです。従って、性的退廃に示されるような社会倫理の崩壊が進行していた、と推測されます。8:28で「この国はギデオンの時代、四十年のあいだ穏やかであった」と記されていますが、その終わりの時期は宗教的に問題であったのみならず、支配・被支配の関係が強化され、弱い者が顧みられｚｙ、社会正義が無視される社会になっていたものと思われます。

そのような社会にあってギデオンは七十人もの息子を持ち、大勢の妻が居た、と書かれています。当時、イスラエルは一夫一婦制が強制されてはいませんでしたが、ギデオンの性的放縦は目に余ります。七十人というのは沢山ということです。そして更にシェケムでは側めに子を産ませました。シェケムは当時の大都市であり、多くの妻のほかに側めと関係をもった、ということです。その子がアビメレクです。「我が父は王」という意味ですから、ギデオンが本人の拒否にも拘わらず、王の扱い、とされていたことが推測されます。著者はあくまでもギデオンに罪を認めることを回避し、ギデオンの死後イスラエルは偶像礼拝に戻った、としていますが、ギデオンの晩年には彼自身が罪ある行いに陥り、社会も、主なる神の民に相応しくない状況に陥っていた、ことは間違いありません。このような背景のなかでアビメレクがギデオンの後継者となるべく画策するのです。アビメレクと言う名は、創世記でゲラルの王として妻サラを妹と偽ったアブラハムを赦した人物として登場します。異邦人ながら主なる神の僕となった人物として尊敬されていた人物の名前です。士師記が成立したのは、捕囚期と想定されていますが、創世記のアビメレクのことを知らないはずはありません。そのような名を頂いたギデオンの不義の子がここでのアビメレクです。

彼は、母の出身地シェケムの有力者たちを味方につけます。“ギデオンには息子が沢山いるがその誰が後継者になるか争いになったら大変なことになる。私は、あなた達の町の出身である母の子です。私を後継者にするのがあなた達のためになります”と説得したのです。現代における利益誘導の選挙運動みたいなものです。町の有力者達はアビメレクにつきます。そして偶像を祀（まつ）ってあるところからお金をとって、アビメレクにあげたのです。いわば異教の神への献金の一部です。それでアビメレクは「ごろつきのずうずうしい者達を雇った」と言われています。そしてギデオンの他の息子を皆殺しにしたのです。但し末っ子のヨタムだけは生き残りました。そして遂に、シュケムの者とベテ・ミロの者はアビメレクを王としました。ベテ・ミロとは「要塞の家」の意味でシェケムの要塞のことです。シェケムは当時、その地域では最大の都市でしたし、その有力者たち、その軍事力を支えている者達の支持を得たので、「王」とされてもおかしくはない状態になっていたのです。これを聞いた末っ子のヨタムはゲリジム山の頂上からイスラエルの民にアビメレクを王とするのは神の御心ではない旨を叫びます。その叫びがちょっと変わっています。9:8-9をお読みします。「木々が自分たちの王を立てて油をそそごうと出かけた。彼らはオリーブの木に言った。『私たちの王となってください。』 9 すると、オリーブの木は彼らに言った。『私は神と人とをあがめるために使われる私の油を捨て置いて、木々の上にそよぐために出かけなければならないだろうか』 」。オリーブはギデオン即ちエルバアルのことだと考えられます。要するに木々に譬えられたイスラエルの民が王になって下さい、と言ってもオリーブに譬えられたギデオンであれば、その必要はない、と言ったであろう」と言うのです。ギデオンが王になることを拒否したことが想定されています。同様の喩えが繰り返し語られます。ついで、いちじくの木がギデオンにたとえられ、つぎにぶどうの木が、たとえられ、アビメレクを王とすることに対する警戒心をあからさまに出します。本当に良いのか、それは真心からでたものなのか、等疑問を投げかけます。最後に、“もし真心からではなく邪悪な心でアビメレクを王とするのなら、アビメレクもシェケムの皆も滅ぼされるであろう”というのろいの言葉を発して逃げてベエルという田舎に逃げます。イスラエルの信仰では人の選びによる王は認められません。サウルの王任命が預言者サムエルによって行われたように、神の権威による選び、でなければならないのです。士師記のなかでいえば王ではありませんが、預言者デボラによってバラクが指導者に指名されています。少なくとも、このような手続きを踏んで選ばれた者でなければならないのです。現代社会ではイランがイスラム教シーア派の下で類似の考え方での政治形態になっています。

　アビメレクは三年間、イスラエルを支配した、と言われています。異常に短期間です。しかしシェケムの町の人々はアビメレクを裏切ります。アビメレクがシェケムに入ってきたら殺すべく山々の頂上に待ち伏せを置きました。そこでカナン人、ガアルという者が出てシェケムの人々をそそのかし、アビメレクなどたいしたことはない、その腹心のゼブルと言う者も単なる役人にすぎない、などと言い、アビメレクには「おまえの軍勢をふやして出てこい」と挑発します。アビメレクから派遣されていたゼブルはこのことをアビメレクに告げた上で、シェケムの町を朝、奇襲することを勧めます。アビメレクは奇襲の準備を整えます。ゼブルはすべてを知ったうえでシェケムの司としてガアルと共に町の門に立ちます。そしてガアルにアビメレクの軍と戦うことを勧めます。アビメレクの勝ちです。ゼブルはこの反乱の指導者ガアルの身内の者全部を追放します。そしてシェケムの民はそれをアビメレクに告げ赦してもらおう、とします。アビメレクは赦しません。民を全滅にし、「町を破壊して、そこに塩をまいた」と記されています。聖なる戦い「聖戦」ではありません。従って当然、「聖絶」でもありません。復讐戦または懲罰戦です。そしてアビメレクは地下室に隠れた人々を木の枝に火をつけ、地下室全体を焼き尽くしてしまいました。やっていることは「聖絶」と類似していますが、それは憎しみより出たもので神の命礼を根拠とした「聖絶」では全くありません。

イスラエルの歴史はある意味で「戦い」の歴史です。純粋イスラエルを形成するための「聖戦」に始まった「戦い」は人間の罪の現実の中で人の欲望を原因とする「人の戦い」となって行き、いかなる意味でも神の義に適うものではなくなっていき、ミカ、イザヤによって「戦争」「軍隊」の全面否定の言葉が語られ、最終的に主なるイエス・キリストにより、「愛敵」の言葉・行動が示されることになるのです。実にイスラエルの生成の初期から罪の塊とでも言うべき「戦い」が記録されているのです。

　そして、本日読んでいただいた9:50に入ります。アビメレクは更にテベツという町を滅ぼすべく軍を進めます。シェケムの北の町です。これを攻め取ってから町のやぐらの屋根に上った人々を火で焼こうとしました。9:53をご覧ください。なんと「そのとき、ひとりの女がアビメレクの頭にひき臼の上石を投げつけて、彼の頭蓋骨を砕いた」とあります。ヨシュア記にもラハブという遊女の女がイスラエルを救う者として登場しますが、この士師記の物語のなかでも名もない女性がアビメレクを殺すと言うことをやってしまいます。そしてアビメレクは女に殺されたなど恥だから私を殺してくれ、と家来に言います。その家来はアビメレクを刺し殺します。士師記の著者は最後に言います。56-57節をお読みします。「こうして神は、アビメレクが彼の兄弟七十人を殺して、その父に行った悪を、彼に報いられた。57 神はシェケムの人々のすべての悪を彼らの頭上に報いられた。こうしてエルバアルの子ヨタムののろいが彼らに実現した」のです。このように神の裁きが実現し、ギデオンの末っ子ヨタムの呪いが実現した、と言うのです。

　アビメレクの話はあってはならない事柄が起こってしまった、というイスラエルの歴史の中でも辱部に属する出来事です。神の意志は奈辺に在るか、を伺うこともなく、また伺う適当な人もなく、ただ欲望、エゴをあからさまにした人間の罪ある行いを示しています。しかし、現代の社会では“こんなことは起きない”と言えるでしょうか。憎しみの連鎖、欲望の衝突はあちこちで起きているのではないでしょうか。また、尊敬を得ていたギデオンが晩年罪の行いに流れて行ったこと、それは高慢のなせる業です。私たち自身、そのような危険はないと断言できるでしょうか。私たちキリスト者は罪を悔い改めることを恥としません。罪は罪と認め、正しい道を指し示して下さる主に赦しと導きを祈り求めましょう。祈ります。

（ご在天の父なる御神様本日は士師記の中からのメッセージでした。そのなかでももっとみ醜い権力争いの結末を見ました。偉大なギデオンの後継者をめぐる争いでのアビメレクの惨憺たる死の有様です。神様が裁き司として罰を下されたものと思います。しかし、このような出来事は私たちの回りに多数、起きており、また、欲望を募らせた結果と考えれば私たちの中にもその悪霊の誘惑の力が潜んでいます。どうぞ、私たちの罪をお許しください。そして悔い改めの福音に立ち、神と人との平和の証人とさせて下さい。主のみ名により祈ります。アーメン）